

上下関係が会話管理に与える影響

—情報提供の「～んですね」「～ですよ」を中心に—

生天目 知 美

1. はじめに

日本語の会話においては会話参加者間に上下関係がある場合、敬語やデス・マス体などの文体選択だけではなく、会話の展開にも影響を及ぼす。宇佐美 (1993)、三牧 (1999) は上下関係のある会話について、目上の話者が会話の主導権を握り、積極的に新しい話題を導入したり、聞き手の発話順番をコントロールする傾向があることを報告した。本稿は、後者の発話順番のコントロール (以下、発話権管理¹⁾) に注目し、上下関係のある会話において「ね」と「よ」が発話権管理に対して果たす役割を考察するものである。

発話権管理とは、発話権の獲得と委譲に関わる管理を指す。従来の研究では発話権管理の指標として質問が重視されてきた。質問は次の発話に回答が期待される、いわゆる隣接応答ペアの第一発話として典型的な発話である。さらに、次に話者となる人物を明示的に指定する役割を担っていることから、質問は発話権管理に重要な役割を果たしていると言える²⁾。一方で、会話では質問の他にも情報提供などの発話が多く出現するが、発話権管理の側面からの分析はほとんどされていない。情報提供の発話の場合、次の話者が担うべき役割や次に話者になるべき人物の指定が明確に想定されないことが理由として考えられる。

確かに、情報提供の発話は以下の例に示すように、A の情報提供発話の後では聞き手だった B が引き取って話題を発展させる可能性や、話し手 A がそのままターンを持ち続け、自ら話題を発展させる可能性がある。

(1) A: 今日は私の誕生日なんです {ね/よ}。

a) B: そうなんですか。おめでとうございます。パーティーとかするんですか。

b) A: だから今日はパーティーをするんですが、B さんも良かったら来ませんか。

しかし文末に「ね」や「よ」が付加された場合、後続する発話の傾向に違いがあることが指摘されている (メイナード 1993)。上記の例でも「ね」に後続する発話は、話者

がターンを保持する(1b)の方がより自然であるように感じられる。このことは、後続発話の指定を明示的に行わない情報提供発話が、「ね」「よ」の付加によって発話権管理に違いが生じる可能性があることを示唆している。

本稿では、文末の「ね」と「よ」が担う発話権管理の特徴の違いに注目し、上下関係のある会話を分析することで、情報提供の発話でも目上と目下の役割関係の特徴が見いだせることを明らかにする。

考察対象とする情報提供発話としては、(1)で示したような「のだ」で終わる発話(「のだ」文)とする。(1)の「のだ」文は、野田(1997)が「対人的ムード」とするものであり、話者が既に認識した事態を聞き手に提示する「のだ」である。非「のだ」文であっても対人的ムードの「のだ」と同様の機能を持つが、会話の展開という側面から見て、「ね」「よ」が「のだ」文に付加された場合と非「のだ」文に付加された場合とでは効果が異なる可能性がある。以下の例を見られたい。

(2) A: この絵が好きなんですか?

B: a) はい。この画家の作品の中で一番好きですね。・・・非「のだ」文

b) はい。この画家の作品の中で一番好きなんですね。・・・「のだ」文

(3) A: この絵が好きなんですか?

B: a) 好きですよ。・・・非「のだ」文

b) 好きなんですよ。・・・「のだ」文

(2)の「ね」の例を見ると、(2a)の非「のだ」文は「ね」の付加によって発話の調子が和らぐ印象があるのに対し、(2b)の「のだ」文の場合は発話の調子が和らぐだけではなく、当該発話の後でさらに発話が続きそうな印象が加わる。(3)の「よ」は下降イントネーションで発話した場合、非「のだ」文では従来から指摘されているような押し付けがましさが感じられるのに対し、「のだ」文では押し付けがましさが相対的に弱く、好きな絵についての話題が続きそうな印象を持つ。(2)(3)から非「のだ」文に付加される「ね」「よ」が主に発話の調子の強弱を変化させるのに対し、「のだ」文の場合はその後の会話の展開がより強く意識されるという違いがあるように思われる。そこで本稿では分析対象を「のだ」文に限定し、発話権管理と「ね」「よ」との関連を分析することにする。以下では、「のだ」文に「ね」「よ」が付加される形式を「～んですね」「～んですよ」と表記し³、分析を進める。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1. 会話の展開と文末の「ね」「よ」

文末の「ね」と「よ」に関してはその基本的な意味の記述が追求されてきているが、その一方で近年では会話の展開との関わり、特に発話権管理や談話における情報構造と

の関わりについて研究が進められている。本節ではメイナード (1993)、Tanaka (2000)、橋本 (2004) を挙げ発話権管理の側面から文末に現れる「ね」「よ」の研究を概観する。

会話において話者交代は一般に発話が完了したと見なされる箇所で行われる。その典型的な箇所の一つは文末である⁴。文末の「ね」「よ」は参加者が発話の終結箇所を予測可能にする要素の一つとされる (Tanaka 2000)。文末の「ね」「よ」と話者交代の関わりについて数量的な調査を行った研究にメイナード (1993) や橋本 (2004) がある。メイナード (1993) は、文末の「ね」「よ」が現れる文に後続する話し手と聞き手の会話行動を、ターンの推移と相づちの有無に注目して比較した。その結果「ね」と「よ」では後続の会話行動に違いがあり、終助詞「ね」は聞き手の相づちが伴いやすく、話者がターンを保持する傾向が高いのに対し、終助詞「よ」は「ね」と比較して話者交代が起こりやすいという報告をしている。橋本 (2004) は話し手が情報を提供する際の「のだ (～んです)」文に「ね」「よ」が付加される場合に限定して調査を行っているが、メイナード (1993) と同様の結果となっている。

2.2. 待遇と文末の「ね」「よ」

会話参加者の上下関係という観点から終助詞「ね」「よ」の使用を分析した研究は管見の限りない。待遇の観点から終助詞「ね」「よ」について言及している研究には、伊豆原 (1993, 1994)、橋本 (1995)、宇佐美 (1999) などがある。

伊豆原 (1993, 1994)、橋本 (1995)、宇佐美 (1999) は終助詞「ね」「よ」の基本的な機能を話し手と聞き手の情報の一致／不一致或いは共有／非共有を表わすものとして捉え、その機能を待遇と関連づけた。例えば、宇佐美 (1999) は情報を聞き手と共有していることを表わす「ね」が話し手しか知らない情報に用いられるものとして以下の(4)を挙げている。(4)の話し手は自分の長女の年齢について言及している。

(4) まだ一、あの一長女が23歳なんですね。

この場合聞き手は当該の情報を知らないと考えられるが、「あえて「ね」を用いて聞き手の情報の共有性を示唆することによって、発話を緩和する機能を果たす」(Ibid:251) とし、「相手を配慮して発話を和らげるのであるから、典型的なネガティブ・ポライトネス」(Ibid:254) に相当すると述べている。一方「よ」については聞き手が知らない情報であることを示す標識と捉えられ、情報量の優位性や態度の優位性を表し、使用が回避されるべき場面があるとされる (伊豆原 1994、橋本 1995)。

情報保有量の観点から文末の「ね」「よ」の使用と待遇の関係を捉えようとする研究には、聞き手が当該情報を知らない想定することは避けられるべきとの認識があるように思われる。この立場に従えば、「ね」の使用は好ましいのに対し、「よ」の使用は回避されるべきということになる。しかし後述のように、実際の会話においては目下の話者が目上の話者に対して「よ」を頻繁に使用しているという実態がある。情報保有量が

らの説明では目下がなぜ「よ」を多用するのか、十分な説明ができないことを示唆している。これらの問題を明らかにするためには、実際の会話において「ね」「よ」がどのように使用されているか観察する必要がある。

2.3. 本研究の立場

本稿では文末の「ね」「よ」が発話権管理に寄与するという先行研究を踏まえ、従来は情報保有量の観点から分析されることが中心であった「ね」「よ」と待遇との関わりを、発話権管理という新たな観点から分析を行う。資料は学年差のある大学生の自由会話⁵を用い、発話者が待遇を意識する上下関係のある会話として扱う。上下関係のある会話においては会話を進める主導権は目上が取ることが典型であると考えられる。会話の主導権を構成する要素の一つである発話権管理にも、上下関係が反映されるものと予想される。

以下、4節では両形式が後続の発話に及ぼす特徴を発話権管理の観点から捉える。さらに5節では、異なる発話権管理の特徴を持つ「ね」「よ」の使用頻度と使用場面を目上・目下の話者で比較・分析する。その結果、使用される動機が異なっていることを指摘し、情報提供発話でも発話権管理の側面から目上と目下の特徴が見いだせることを論じる。

3. 資料の概要

3.1. 分析資料の概要

本稿で用いる会話資料は、上下関係のある大学生の初対面会話、5会話（合計約150分）である。1997年に筑波大学構内の教室において録音された。録音した資料を、ザトラウスキー（1993）を一部変更し文字化を行った⁶。

会話参加者は、同性（女性）、大学生（19歳～21歳）で、全5会話のうち3名の話者がそれぞれ2つの会話に重複して参加しているため、異なり人数は7名である。同学部に所属しており、ペアになった会話参加者にはそれぞれ1学年の学年差がある（3年生4名、2年生3名）。本稿の会話例における話者記号はアルファベットのAからGを用いるが、目上には「上」、目下には「下」を付した（例：上A）。会話内容は特に指定せず、15～20分程度自由に話すよう指示した。会話の終了は会話参加者に任せた。

会話参加者の親疎関係は初対面に相当するレベルで統一されている。なお、会話参加者は相手に学年差があることを事前に知っているが、会話の冒頭部分においても学年情報について情報交換している。同一話者が同一会話内でデス・マス体とダ体を混用するスピーチレベルシフトが観察され、全ての会話において目下の話者は相対的にデス・マス体を多く使用していた。ただし、同性であること、同学部に所属していることから、初対面ではあっても比較的打ち解けた雰囲気では会話が行われていた。なお、会話終了後に互いの言語行動に対して特に不自然さや不快感がなかったことを質問し確認した。

【文字化記号凡例】

- ／／：／／の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
- (0.x)：()の中の数字は10分の1秒を単位で表示される沈黙の長さを示す。
測定方法はザトラウスキー（1993:別冊資料 p.2）に従った。
- ：「—」の前の音節が長く伸ばされていることを示す。
- ?：疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
- 。：下降のイントネーションで文が終了することを示す。
- 、：ごく短い沈黙あるいはさらに文が続く可能性がある場合の名詞句、副詞、従属節などの後に記す。
- { | }：{ | }の中の行動は非言語的な行動の「笑い」等を示す。

3.2. 分析資料における「～んですね」「～んですよ」の使用頻度

会話資料において本稿で分析対象となる「～んですね」は44例、「～んですよ」は84例収集された。以下の表1に話者毎の使用頻度を示す。

表1 目上/目下の話者と「～んですね」と「～んですよ」の使用頻度

会話番号：話者	～んですね		～んですよ	
	目上	目下	目上	目下
1：上A／下E	6	0	2	11
2：上A／下F	25	0	13	5
3：上B／下F	1	0	3	19
4：上C／下E	2	1	5	22
5：上D／下G	9	0	2	2
合計	43 (98%)	1 (2%)	25 (30%)	59 (70%)
用例合計	44 (100%)		84 (100%)	

表1で示したように、目上の話者（3年生）と目下の話者（2年生）の使用頻度には偏りが見られた。「～んですね」は目上の使用でほぼ占められているのに対し、「～んですよ」は全体の7割を目下が使用していた。また、目上は両形式の使用が観察されるのに対し、目下が使用した形式はそのほとんどが「～んですよ」であり、「～んですね」の使用は1例のみであることが大きな特徴として挙げられる。限られたデータではあるが、これらの会話における目下の話者は「ね」の使用を避けているように見える。

2節で指摘したように情報保有量の観点から聞き手に配慮するならば、聞き手が当該情報を知らないことを示す「よ」は回避され、聞き手が当該情報を持つという想定を示す「ね」が好まれることが予想される。しかし目上の話者に配慮すると考えられる目下

の話者が「よ」の使用に積極的であり、「ね」の使用を避けるという逆の結果となった。情報保有量の観点からはその理由を十分に説明できないことが明らかである。本稿では表1で示した目上と目下の「～んですね」「～ですよ」使用の偏りを、会話の主導権の観点から説明することを試みる。会話の主導権を持つことは聞き手に対する支配的立場 (dominance, Linell et al. 1988) を示すと考えられ、この点で待遇と関係があると考えられるからである。以下では会話の主導権の一つである発話権管理の観点から「～んですね」と「～ですよ」の特徴を明らかにしていきたい。

4. 「～んですね」「～ですよ」に見られる発話権管理の特徴

4.1. 発話権管理のパターン

本稿では「～んですね」「～ですよ」が持つ発話権管理の特徴を、後続ターンを話し手/聞き手のどちらが取るかに注目する。以下の表2に示したように、次のターンを話し手⁷が継続して持ち続ける場合（「ターン保持型」）と、聞き手だった参加者がターンを取って発話権が移動する場合（「ターン交代型」）に分類する。

表2 「～んですね」と「～ですよ」における発話権管理のパターン

ターン保持型	話し手： ～んですね/よ	ターン
	聞き手： (相づち)	
ターン交代型	話し手： ～んですね/よ	
	聞き手： (相づち)	ターン

ターンの移行だけではなく聞き手の相づち⁸の有無にも注目し「相づち有/相づち無」のタイプに下位分類した。表2に示したパターンにしたがって「～んですね」「～ですよ」発話に後続する会話行動の傾向を調べた。その結果を以下の表3と図1に示す。図1には形式全体に占めるそれぞれのパターンの割合を示した。図1の「保持/交代」はターン保持とターン交代を、「相づち有り/相づち無し」は相づちの有無をそれぞれ示している。

表3 「～ですよ」「～んですね」に後続する会話行動

形式	ターン保持型		ターン交代型		その他 ⁹	合計
	相づち有	相づち無	相づち有	相づち無		
～んですね	29 (66%)	8 (18%)	2 (5%)	2 (5%)	3 (7%)	44
	37 (84%)		4 (9%)			
～ですよ	31 (37%)	14 (17%)	9 (11%)	22 (26%)	8 (10%)	84
	45 (54%)		31 (37%)			

(小数点以下1位四捨五入)

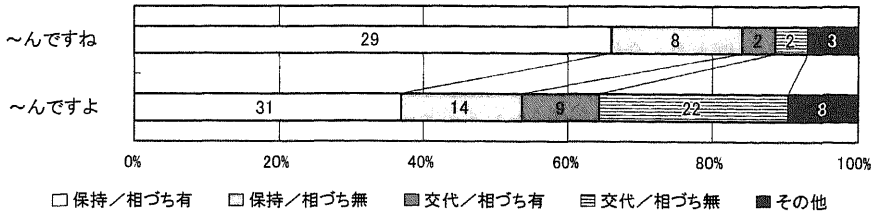


図1 「～んですね」「～んですよ」に後続する会話行動（数値は用例数）

表3と図1から「～んですね」はターン保持型が圧倒的に多いことが分かる。相づち有り（66%）と相づち無し（18%）を含め、全体の84%に上った。一方の「～んですよ」も全体の傾向ではターン保持型が全体の半数を超える54%ではあるが、37%あるターン交代型との差はあまり大きくない。ターン交代型との差はあまり大きくない。この結果から、「よ」の場合には後続のターンが保持されるか否かの差がそれほど認められないのに対し、「ね」の場合には話し手がターンを続ける傾向が極めて高いことが分かる。この結果はメイナード（1993）や橋本（2004）で報告された結果と合致する。以下に、ターン保持型の「～んですね」とターン交代型の「～んですよ」の例をそれぞれ示す。なお以降の会話例には、相づちに点線、後続のターンに波線を付す。

- (5) 【上Dの旅先での恐怖体験について 会話5】 ターン保持型：相づち有り
 324 上 D：なんか、んー、私も（筆者注：中国語が）話せないんだけどー、なんか一人で、夜上海の、なんか海辺に、バスに乗っていった[□]のね
 325 下 G：ん
 326 上 D：夜中12時過ぎてから、そしたらなんか終バスがなくなってる
 327 下 G：ん
 328 上 D：帰れなくなって、
- (6) 【下Eの住まいについて 会話4】 ターン交代型：相づち有り
 970 上 C：ね、今ってきアパート？
 971 下 E：今一の矢（筆者注：学生宿舎の名称）の2人部屋な[□]んですよ。
 972 上 C：あ、そうなんだ。
 973 上 C：2人部屋いいよね。でもね。
 974 下 E：ん、結構楽しい。

4.2. 後続する相づちの特徴

後続する相づちの機能について堀口（1997）¹⁰を参考に調べたところ、「ね」と「よ」では後続する相づちの機能に違いがあることが分かった。「～んですね」に後続する相

づちには「聞いている／理解している¹¹⁾」ことを示す「うん／んー」や「はい／はー」が31例中24例あり、全体の77%を占めた。その他、「えー」「笑い」などの感情の表出が5例(16%)、「わかります」などの同意が2例(7%)、「そうですか」などの理解を示す相づちが「その他」に1例観察されたのみであった。

一方、「～んですよ」の場合には「あ、そうか」などの「理解」を表す相づちが最も多く、40例中20例(50%)であった。「～んですね」で8割近く見られた「うん」などの「聞いている／理解している」相づちは8例(20%)にとどまった。その他「うそ」や「笑い」などの感情の表出が9例(23%)、「わかる」などの同意が3例(8%)であった。

以上のような傾向は、前節で観察した発話権管理のパターンに関わらず見られた。「～んですね」は聞き手の「聞いている／理解している」という最小限の相づちが後続しやすく、「～んですよ」は「～んですね」と比較すると、より強い反応を示す相づちを後続しやすという傾向が観察される。発話権管理のパターンのみでなく相づちの機能を観察することで、話し手と聞き手が作り出す局所的な関わり方が「ね」「よ」で異なっていると言える。

4.3. 発話権管理のまとめ

「～んですね」と「～んですよ」の後続部分で観察された発話権の管理パターンの特徴は以下のようにまとめることができる。「～んですね」は、聞き手が最小限の相づちを打つことが多く、話し手がターンを保持し発話を続ける傾向が強い。「うん／んー」「はい／はー」などの最小限の相づちは、発話権管理の側面からは「話を続けて」という信号になる(メイナード1993)。一方、「～んですよ」は、後続する聞き手の反応や話し手のターン保持のあり方が一様ではなく、基本的には発話権管理には中立的で非関与的であると言える。

先行研究においてはターン末に出現する「ね」は、話者交代の適切位置(TRPs)を示すマーカーとして捉えられており、本稿で分析対象としている「ね」もターン末に出現する「ね」に含まれる(Tanaka:2000)¹²⁾。しかし本節で明らかになったように、「～んですね」は文末でありながらも、話者が交代せず話し手がターンを持ち続ける環境によく現れ、いわゆる間投助詞の「ね」に近い特徴を持っている。文末に出現する「ね」であっても、常にTRPsをマークするのではなく、「～んですね」のように話し手がターンを保持する発話権管理上の機能を持つものがあるのである。

会話の主導権の観点からは、「～んですね」は話し手自らが発話権を確保するだけでなく発話量や話題の展開の面でも主導権を握ることになり、話し手がより強い主導権を持つと言える。それに対し、「～んですよ」は話し手と聞き手の会話展開に対する関わり方が固定しないことや聞き手が会話の展開により積極的に関与していることから、どちらかが主導権を持つというよりは、両者が共同で会話の展開を作り上げる傾向を持つ¹³⁾。次節では、「～んですね」「～んですよ」が持つこのような会話の主導権的な特徴

が、目上と目下の話者にどのような影響を与えているのかを分析する。

5. 「～んですね」「～ですよ」の出現位置と目上・目下の使用

本節では、前節で明らかになった「～んですね」「～ですよ」の発話権管理の特徴が談話の展開とどのように関連しているかに注目し、上下関係との関わりを考察する。以下では、両形式が出現する談話の場面を話題との関わりで(1)話題導入場面と(2)話題展開場面の二つに大きく分け、(2)をさらに(2-1)話し手の自発的な発話と(2-2)質問に対する応答発話に分類した¹⁴。

- 1) 話題導入場面：話題を切り出す発話に付加される場合
- 2) 話題展開場面：既に話題になっている事柄に関連する発話に付加される場合
 - 2-1) 自発発話：自発的に話し手が提供する情報に付加される場合
 - 2-2) 応答発話：聞き手の質問に対する応答に付加される場合

まず、「～んですね」と「～ですよ」の発話が登場する位置の傾向を確認する。以下の表4に示したように、「～んですね」と「～ですよ」は、共に話題展開場面の自発発話で最も多く現れ、以下話題導入場面、話題展開場面の応答発話と続いた。両形式の比較においては「～んですね」が応答発話で出現する割合が際立って低い。

表4 「～んですね」と「～ですよ」の出現位置

形式 \ 位置	話題導入場面	話題展開場面		合計 ¹⁵
		自発発話	応答発話	
～んですね	14 (34%)	25 (61%)	2 (5%)	41 (100%)
～ですよ	26 (34%)	32 (42%)	18 (24%)	76 (100%)

さらに、目上の話者がどの場面で両形式を用いているか調査した結果、以下の図2及び図3に示したように、目上の話者と目下の話者では使用場面に違いがあることが分かった。

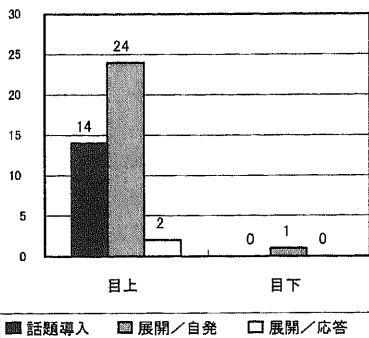


図2 「～んですね」の位置と話者の選択 (使用頻度)

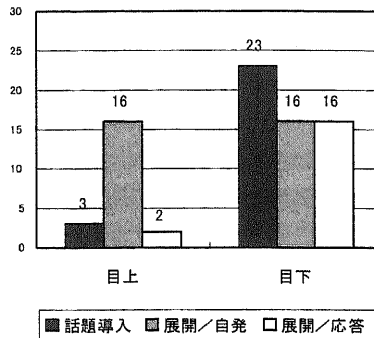


図3 「～ですよ」の位置と話者の選択 (使用頻度)

以下では各形式がどの場面で使用されているか、また各場面でどの形式が使用されているかの2点から目上と目下の比較を行う。なお、「～んですね」は3節で述べたように目下の使用が1例しかなかった。そのため、「～んですね」の使用場面を目上と目下の話者で比較することができない。また、目下の話者が場面によってどのように形式を使用しているかについての分析もできないことを予め述べておく。

まず、目上の話者が場面毎にどちらの形式を用いているかに注目する。図2、図3から話題導入場面においては「～んですね」を多く用いているのに対し（「～んですね」14例、「～ですよ」3例）、展開部分の自発的な発話では両形式とも使用している（「～んですね」24例、「～ですよ」16例）ことがわかる。目上の話者は場面によって使用する形式に違いがあることがうかがえる。一方、「～ですよ」の使用場面を目上と目下で比較してみると、図3に示したように目上の話者は展開場面の自発発話に集中している（21例中16例、76%）のに対し、目下の話者はどのような場面でも「～ですよ」を使用している。目上の話者が場面によって両形式を使い分けているのに対し、目下の話者は「～ですよ」のみを使っていることが分かる。

このような両形式の選択の違い及び使用場面の違いは、目上と目下が両形式を会話管理上異なる動機で使用していることを示唆している。以下ではまず、他の2つの場面に比べ目上・目下の話者の使用に共通点が見られる話題展開場面の自発発話を取り上げる。その分析をふまえ、話題導入場面、話題展開場面の応答発話の順に目上と目下の話者の違いを論じる。

5.1. 話題展開場面/自発発話

話題展開場面の自発発話では、「～んですね」が41例中25例（61%）、「～ですよ」が76例中32例（42%）と、両形式ともに多く用いられている。それぞれの用例を観察した結果、「～んですね」は後続する発話の背景的な情報に付加され、「～ですよ」は

展開中の話題の中心となる情報に付加される傾向があった。

まず「～んですね」の例をあげる。以下の(7)は、目上の話者 B が旅行先の京都が予想外に暑くて驚いたことを話している場面である。

(7) 【上 B が旅行に行った京都の暑さについて 会話 4】

206 下 F まだまだこんなもんじゃないって。

207 上 B ん。つくば来て寒い、寒いっていうか、すごく涼しく感じた **のね**。

208 下 F え、そうですね。

209 上 B ／びっくりしっちゃった

210 下 F おー

非常に暑かった京都から、地元のつくばに戻ってきて涼しく感じた、という発話に「～んですね」が使われている。ここでの主要なトピックは京都の暑さであり、つくばの涼しさそのものに焦点があるわけではない。むしろ京都の暑さを強調する役割を果たしており、情報の重要性という点において付随的な情報である。また、「～んですね」の発話は後続する 209 上 B 「びっくりしっちゃった」の理由に相当すると考えられる。他にも、付帯状況や前提情報、具体例の提示など、背景的な内容の発話で用いられる傾向が「～んですね」全体に観察された。発話権管理の観点からは、話し手は聞き手の理解を促しつつターンを保持し、後続するより重要な情報内容のターンに移行しやすくする効果があると言える¹⁶。

一方「～ですよ」は、話題として中心的に語られている情報に付加される傾向が観察された。以下の(8)は聞き手の相づちが挿入されるターン保持型の例である。

(8) 【上 D が中国で食べた蛙料理について 会話 5】

647 上 D : あ、これ筋肉なんだな、と思いながら食べたけど

648 下 G : {笑い} あー

649 上 D : なんか蛙がね、皮付きのままぶつ切りにされてて、スープになって **んだよ**。

650 下 G : (息をのむ音) スープですか。

651 上 D : なんか、揚げ物とか炒め物はまだいい **んだよ**、皮ないから。

652 下 G : そうですね

653 上 D : スープは皮がついてた

上 D が蛙を食べたという話題の中で蛙料理の気持ち悪さを主張する部分を強調する部分で「～ですよ」が用いられている。上 D がターンを保持しながら会話を進めているが、聞き手は先行発話の一部を繰り返して驚きを示したり (650 下 G)、651 の主張を補強する部分では同意を示したり (652 下 G) している。「～ですよ」では目上と目下

が 16 例ずつ用いており、使用割合のみでなく、用いられ方にも差が認められなかった。

このように、話題展開場面の自発発話では「～んですね」が聞き手に理解を促しつつターンを維持し、後続発話に移行しやすくしているのに対し、「～ですよ」は当該情報を強調し聞き手の反応を誘発することに寄与していると言える。目上の話者はこのような特徴を持つ両形式を状況によって使い分けしていると考えられる。しかし、目下の話者は「～ですよ」を使用する一方で「～んですね」の使用は 1 例のみである。目下の話者は両形式を自由には使用できないことがうかがえる。

5.2. 話題導入場面

話題導入場面では、「～んですね」は 41 例中 14 例 (34%)、「～ですよ」は 76 例中 26 例 (34%) 使用されている。両形式とも話題導入場面での使用が用例全体に占める割合は変わらない。しかし、「～んですね」の使用は専ら目上であるのに対し、「～ですよ」を使用しているのは目下に偏っている (26 例中 23 例、89%)。

話題導入場面で用いられる「～んですね」は、話題展開場面の自発発話と同様に、後続する話題や情報の背景的な発話に用いられ、話し手がターンを保持し話題の展開をコントロールする傾向が観察された。以下の例では物語を語る際に、物語の設定部分に用いられている。

(9) 【上 D の旅先での恐怖体験 会話 5】

324 上 D : なんか、んー、私も (筆者注 : 中国語が) 話せないだけどー、なんか一人で、夜上海の、なんか海辺に、バスに乗っていった のね

325 下 G : ん

326 上 D : 夜中 12 時過ぎてから、そしたらなんか終バスがなくなってる、

327 下 G : ん

328 上 D : 帰れなくなって、

329 下 G : ん

330 上 D : なんかバスで 30 分か 40 分以上かけて来たから、どうやって帰ったらいいんだろうって思って、タクシーに乗った のね。

331 下 G : はー

332 上 D : そしたらなんか男の人で、助手席に座れっていう のね。

333 下 G : えー

上 D が旅先で起こったタクシー内の恐怖体験を語る冒頭部分である。「～んですね」が付加された 324 はまさに物語を始める冒頭部分であるが、その後の 326・328・330・332 もまた物語の時間、状況設定、登場人物の導入などの方向付け (Orientation¹⁷) を行う発話である。物語の中心的な出来事は、この後に語られるタクシー運転手との会話で不安や恐怖に駆られた出来事であることから、330 と 332 も物語全体の導入部分として

考えられる。目上の話し手Dはこのような発話で「～んですね」を使用することにより、中心的な出来事はまだ先にあることを暗示しつつ、主導権を持って物語を進めている。

一方の「～ですよ」による話題導入は26例あったが、「～んですね」と同様のターン保持型(14例、54%)の他に、以下の(10)に示すようなターン交代型(12例、46%)も観察された。

(10) 【部活 (バレーボール) について→水泳 会話2】

1028 上A: //バレーカー

1029 下F: んー

1030 上A: (0,7) 部活ねー

1031 下F: 泳げない **んですよ**、私。

1032 上A: 私も泳げないよ。

1033 下F: でも、水泳なんか、やりたくてー

1034 上A: んー

1035 下F: んー

1036 上A: あ、そうなの?

1037 下F: んー

1038 上A: あ、でも前向きだね。

この例では、部活についての話題が収束し、水泳の話題に移行する場面である。1028上Aから1030上Aまでは次の話題を探して限られた発話が続くが、1031下Fでそれまで話題に上っていなかった水泳について、「泳げないんですよ、私」と新しい話題を導入している。「～んですね」の例に見たような背景的な状況を示す情報を十分に提示しないままの話題導入であることが特徴的である。次の(11)の例でも、目下の話者は十分に背景的な情報を提示しないまま、壁紙の色の話題からうさぎの話題を導入している。

(11) 【下Eの部屋に貼った壁紙の色→ペット (うさぎ) 会話4】

1047 上C: その、なんか、水色なんだよね。

1048 下E: //そうそうそう。

1049 上C: あー、いいないいなー。

1050 下E: あと、うち今うさぎいる **んですよ**。

1051 上C: //えー。なんでうさぎがいるの?

1052 下E: {笑い}

1053 上C: 飼ってるの?

このような話題導入に「～ですよ」を用いるのは目下の話者の特徴であった。さら

に特徴的なのは、目下の話者は新しい話題を導入したものの、その話題の発展には積極的でないという点である。自分の発話順番を取らずにパスしたり（例 10 の 1035 下 F）、笑ったりして（例 11 の 1052 下 E）、積極的に発話権を保持しようとはしていない。自らは積極的に話題を展開させようとはせず、聞き手の反応を待っているように見える。これらの例からは、目下の話者が話題導入という会話展開上の主導権を取りつつも、発話権の主導権を取らず聞き手に任せる様子がうかがえる。「～んですね」による話題導入では、話題管理と発話権管理の両方において主導権を持つことになることを鑑みると、発話権管理にそれほど関与しない「～ですよ」を使用することは目下の話者が主導権を持ちすぎないようにするための戦略の一種と考えることができるのではないかと思われる。

5.3. 話題展開場面／応答発話

応答発話の「～ですよ」は全体の 76 例中 18 例（24%）であり、目下が多用している（18 例中 16 例、89%）。一方で「～んですね」は 41 例中 2 例（5%）と極めて少ない。まず、目下が多用している「～ですよ」を取り上げる。

「～ですよ」による応答発話は 18 例中、ターン保持型が 11 例（61%）、ターン交代型が 7 例（39%）見られた。以下にターン交代型の例を示す。

(12) 【高校のプールについて 会話 4】

1045 上 A：ねー、だから、プール、授業であった？高校の時。

1046 下 F：なかった **んですよ**。

1047 上 A：なかったの？／／いいね。

1048 下 F：中高と。

1049 上 A：あ、中学校もなかったの？

上 A の質問に対する応答で「～ですよ」が用いられている。非「のだ」文の「なかったです」でも自然な応答であるが、「のだ」文が用いられている。このような「のだ」について、野田（1997）は「話し手が単に質問に答えるだけではなく、その応答文をきっかけとして、自分の話したいことを提示し、話を続けていこうとしているとき（Ibid:142）」に用いられると指摘している。このような「のだ」は話し手が当該情報をその後の話題として採用したいことを暗に示し、話題の方向付けに寄与すると考えられる。ただし、「ね」のように直接的に会話の主導権を握るのではなく、「よ」によって聞き手の反応を誘発するという、より間接的な方法で会話の展開に寄与しているものと思われる。話題導入場面と同様、ここでも話題の方向付けには寄与しつつ、発話権管理には中立的である目下の戦略がうかがえる。

「～んですね」はこれまで述べてきたように、背景情報に付加されやすいという傾向がある。応答が焦点情報であることが「～んですね」の用例数が少なかった理由として

考えられる。しかし、出現した2例は例外ではなく、これまで述べてきたことの延長として説明することができる。用例を観察すると、応答発話の「～んですね」は、応答が「～んですね」発話で完結しない場合に用いられていた。以下の(13)では、応答部分で「～んですね」が用いられている(303上D)が、応答はさらに305上Dに続いている。

(13)【上Dの中国旅行について 会話5】

300下G：え、なんで中国に旅行に行ったんですか。

301上D：え、なんか、あたしは中国語をやってるっていうのもあるし、

302下G：ん

303上D：あと小学校の時から、三峡下りをしたかったのね、ずっと。

304下G：は二

305上D：でもなんか、もう、三峡ダムできるじゃない。そしたら景色変わるから、あ、今年のうちにいこうと思って。

上Dは中国旅行の動機について、いくつかの理由を述べている。「～んですね」が附加された発話は応答として十分完結する内容である。しかし話し手はさらに「今年のうちに行きたかった」(305上D)という理由を追加しようとしていたことが分かる。話者は「～んですね」を用いることにより、自分の発話がまだ完了していないことを示し、聞き手によってターンが取られるのを回避しようとしたと解釈できる。このように、焦点情報である応答発話であっても「～んですね」によって発話権を管理し、会話の展開をコントロールすることを示していると考えられる。

5.4. 出現位置と目上・目下の使用のまとめ

以上の観察から、目上の話者は話題を導入し展開していく際に「～んですね」を用いながらターンを保持し後続する展開を自らコントロールしていく場面と、話題の展開上強調したい内容については「～んですよ」を用いて聞き手のターンを誘発する場面とを使い分けている様子が観察された。一方目下の話者は、さまざまな展開上の場面で「～んですよ」を用い、聞き手のターンを誘発して会話の展開に聞き手を取り込むストラテジーを取っていることを述べた。目下の話者は必ずしも目上の話者に会話の展開を任せているというわけではない。「のだ」文によって話題導入をしたり応答したりすることで、話題の展開に貢献していることは明らかである。話題管理の側面では主導権を取りつつ、発話権管理の側面ではより消極的、間接的な態度を示すことが「～んですよ」によって可能になると考えられる。

6. まとめ

本稿では、これまでほとんど注目されてこなかった情報提供の発話と発話権管理に焦

点を当て、「～んですね」「～ですよ」が発話権管理に関して異なる機能を持つことに着目し、分析を行った。その結果従来指摘されてきた情報要求の発話だけでなく、情報提供の発話においても上下関係の力関係が見いだせることを示してきた。

本稿で明らかになった点をまとめると次のようになる。まず、目上の話者は「～んですね」と「～ですよ」を場面に応じて使い分けている。すなわち、話題導入や話題展開の場面で背景的な情報を提供する際には、「～んですね」を用い、聞き手の理解を確認しつつターンを保持し自ら話題を展開させて行くのに対し、情報を強調する場面では「～ですよ」を用いて聞き手からより強い反応を誘発する。一方、目下の話者は、「～んですね」はほとんど使用せず「～ですよ」を多用する傾向があった。目上の話者のように情報内容を強調するだけでなく、聞き手からのより強い反応を引き出し話題の展開に参加させることで自らは発話権管理に関与しないようにすることから「～ですよ」が多用されていると考えられる。さらに、話題の導入や話題の発展には寄与しつつ、発話権管理の側面では主導権を取らないようにする、という目下の戦略があることを指摘した。

従来の研究では、話し手と聞き手の情報保有量の差から、「ね」「よ」の選択と待遇について説明されることがほとんどであった。特に「よ」に関しては、聞き手が「当該情報を持たない」ことを指標し、待遇的に避けられるべきことが強調されてきた。しかし、情報保有量では説明できない現象がある。本稿では発話権管理に注目することで、「ね」と「よ」が待遇と関わるのは情報保有量だけではなく、会話の主導権という別の側面があることを示した。

本稿では非常に限られたデータに基づいて分析を行ったため、今回の結果がどの程度一般性を持つのか、今後は様々なデータで検証を行う必要がある。また冒頭でも触れたが、今回考察対象とした「のだ」に付加する「ね」と「よ」は非「のだ」に付加された場合とでは、語用論的な効果が異なっているように感じられる。この違いは語用論的な効果にとどまるのか、それとも「ね」「よ」の意味・機能とも関わってくる問題なのか、検討の余地があると思われる。今後の課題としたい。

【付記】

本稿は平成13年度～15年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書(課題番号13610483)「日本語における話しことばの文法研究」研究代表者 杉本武(2004)に掲載された論文に加筆・修正を加えたものである。

【注】

- 1 三牧(1999)は話題導入の積極性を「話題管理」、発話順番のコントロールを「発話権管理」と呼んでいる。
- 2 相手に質問することによって話題を選択、展開した結果、話題管理に密接に寄与していることも、質問が重視されている理由として考えられる。
- 3 「～んですね」は「～んですね」「～のね」を、「～んですよ」は「～ですよ」「～んだよ」「～のよ」

を代表する。「ね」は「よ」と異なり、情報提供の発話としては「～んだ」に付加する「～んだね」という形式が不自然になる（例：私、明日は用事があるんだね。だから学校には来ないよ。）。橋本（2004）もこの現象を指摘しているが、なぜ「～んだね」という形式が不自然になるのかは明らかにされていない。その理由を追求することは興味深い課題であるが、本稿の趣旨とは離れるため別稿に譲る。

- 4 会話においては発話を構成する単位が文であるとは限らず、さらに会話における「文」は書き言葉における文とは性質が異なっている（岩崎 2007）。ここでは書き言葉における文と会話で出現した「文」が一致し、発話を構成している場合を想定している。
- 5 自由会話としたのは、話し手と聞き手の役割を固定させないことで参加者間の上下関係が会話管理に与える影響をより直接的に分析できると考えたためである。
- 6 変更箇所は以下の 2 点である。
 - 1) ザトラウスキーは「相づち的な発話」を先行する発話の終わる箇所から始まるように右側に寄せているが、本稿では寄せずに行の冒頭から記す。
 - 2) ザトラウスキーは従属節が発話中に二つ以上連続する場合、異なる発話単位として区別するが、本稿では区別せずに一つの発話単位とする。
- 7 以下、「話し手」は「～んですね」と「～んですよ」の発話者を指し、「聞き手」はその発話が向けられた参加者を指す。
- 8 本稿で相づちと認めるのは、「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現（堀口 1997:42）」とする。どのような表現を相づちと見なすかは研究者によって異なる部分がある。例えばメイナード（1993）では、「情報の追加、訂正、要求などをとする表現」についても相づちとして認めている。本稿ではこのような表現は、話し手が発話権を行使している間に聞き手が取る言語行動の 1 つではあるが、相づちとは見なさずターンとして扱った。
- 9 聞き手の相づちが後続した後、話し手／聞き手双方がターンを取らず相づちが続いたり、話し手が自らの発話の後に「ん／んー」などの相づちを後続させるものを「その他」に分類した。
- 10 堀口（1997）は、相づちの機能を聞き手が先行発話をどのように共有したかを示すものとして捉え、「聞いているという信号」「理解しているという信号」「同意の信号」「否定の信号」「感情の表出」の 5 つの機能を認めている。
- 11 「聞いている／理解している」とは、「聞いているという信号」と「理解しているという信号」の両方を持っていることを示している。「うん／はい／はー／ええ」などの最小限の相づち詞は、句の切れ目であればどこでも打てる相づちである。「聞いている」と「理解している」の明確な区別ができないことが多いという指摘もあるため（堀口 1997:55）、両方の機能を持つものとして認めた。
- 12 本稿で扱っている「～んですね」は“reporting”の「ね」として分析されている。（Tanaka 2000:1149）
- 13 なお「～んですよ」について、目上と目下の話者が発話権管理に与える影響を調べた結果、話者が目下の方が目上よりもターン交代型が多く見られたが、カイ二乗検定では有意差が認められなかった。（目上は全 21 例中ターン保持型が 15 例（71.4%）、ターン交代型が 6 例（28.6%）であったのに対し、目下は全 55 例中ターン保持型は 30 例（54.5%）、ターン交代型は 25 例（45.5%）であった。）
- 14 「話題導入」の判定は、ポーズ、前後の内容の関わり方、話題内容が会話参加者のどちらに属するか（話し手と聞き手の話題を区別する）などを指標として筆者が判断した。
- 15 合計数は表 3 で「その他」に分類された例を除いた合計を示している。
- 16 橋本（2004）にも同様の指摘がある。
- 17 Labov（1972）による物語の内部構造の一要素で、物語の出来事の前に語られるとされる。

【参考文献】

伊豆原英子（1993）「『ね』と『よ』再考－『ね』と『よ』のコミュニケーション機能の考察から－」『日

- 本語教育』80, pp.103-114. 日本語教育学会.
- 伊豆原英子 (1994) 「終助詞「よ」の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから「よ」の使用条件を探る—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2, pp.43-63, 名古屋大学留学生センター.
- 岩崎勝一 (2007) 「会話にとってく文」とは何か』『言語』36-3, pp.30-35, 大修館書店.
- 宇佐美まゆみ (1993) 「初対面の二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー: 話者間の力関係による相違—日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』21, pp.25-40.
- 宇佐美まゆみ (1999) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』, pp.241-268, ひつじ書房.
- 楠本徹也 (1995) 「終助詞「よ」の待遇性に関する一考察」『留学生日本語教育センター論集』21, pp.1-14, 東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 黒沼祐佳 (1996) 「会話における turn-taking と情報共有のイニシアティブの関係」『筑波大学応用言語学研究』3, pp.103-113.
- 阪田雪子・倉持保男 (1993) 『教師用ハンドブック 4 文法Ⅱ改訂版』国際交流基金.
- ザトラウスキー・ポリリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版.
- 梶本総子 (2000) 「人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造」『世界の日本語教育』10, pp.221-239, 国際交流基金日本語国際センター.
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, pp.71-95.
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』くろしお出版.
- 橋本直幸 (2004) 「「～んですね」についての覚え書き—形式的記述からその談話機能を探る—」『日本語研究』24, pp.1-15, 東京都立大学国語学研究室.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版.
- 三牧陽子 (1999) 「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性—異学年大学生間の会話の分析—」『日本語の地平線—吉田彌壽夫先生古稀記念論集—』pp.363-376, くろしお出版.
- メイナード泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版.
- Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness: some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Itakura, Hiroko. 2001. "Describing conversational dominance" *Journal of Pragmatics* 33, pp.1859-1880.
- Labov, William. 1972. *Language in the inner city*, Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Linell, Per. et al. 1988. "Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis" *Linguistics* 26, pp.415-442.
- Tanaka, Hiroko. 2000. "The particle *ne* as a turn-management device in Japanese conversation" *Journal of Pragmatics* 32, pp.1135-1176.

(なばため ともみ 筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究所 応用言語学)